

# FOMCと決算が相場下落の歯止めとなるか



シニア・ストラテジスト 石黒英之

## ポイント① 目先はFOMCの内容が焦点

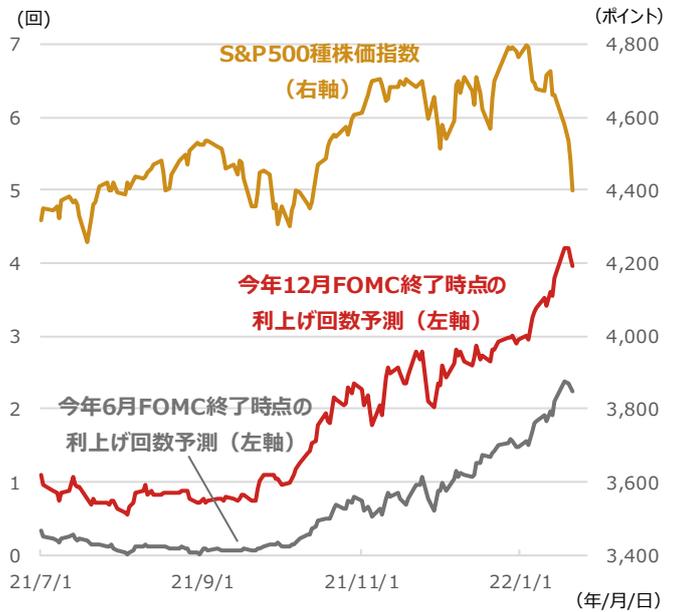
21日のS&P500種株価指数は4営業日続落し、週間では5.7%安と、週間ベースでは2020年3月以来となる下落率を記録、ハイテク株の比重が大きいNASDAQ100は先週、直近高値からの下落率が10%を超え、調整局面入りとなりました。両株価指数ともに長期トレンドを探る上で重要なテクニカル指標の200日移動平均線を下回っており、正念場を迎えているといえます。

目先の焦点は、25～26日のFOMC（米連邦公開市場委員会）と考えられます。市場では6月FOMCまでに2回の利上げを100%織り込んでいるほか、年内4回の利上げについてもほぼ100%織り込んでいます。長期化する米国のインフレを抑制すべく、FRB（米連邦準備制度理事会）が金融引き締めペースを加速させるとの懸念が、足元の株安につながっているとみられます（右上図）。もともと株安に歯止めがかからなければ、逆資産効果を通じて景気悪化につながるため、FRBはインフレ抑制スタンスをみせつつも「今後の金融政策はデータ次第」などと「引き締め加速一辺倒でもない」とのメッセージを出してくるかが焦点となりそうです。

## ポイント② 企業決算の内容もカギに

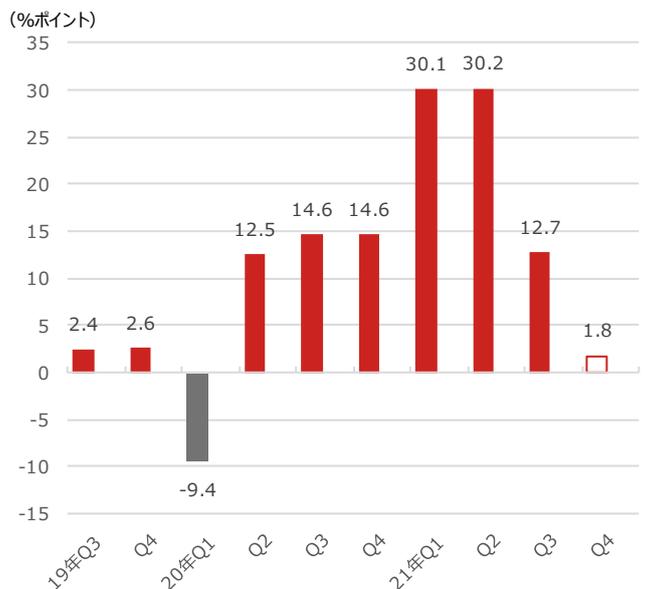
また今週から本格化する米主要企業決算も、米国株にとって重要といえます。25日には米マイクロソフト、27日には米アップルが決算発表予定です。S&P500企業のEPS増益率は事前予想から上振れることが多く、21年Q3まで6四半期連続で事前予想を2桁%ポイント上回っています（右下図）。企業の好決算が確認されるようだと、金融相場から業績相場への移行が可能との見方が広がりやすく、株価が一旦下げ止まる展開も想定されます。

## 市場が予測するFRBの利上げ回数とS&P500



期間：2021年7月1日～2022年1月21日、日次  
・FF（フェデラルファンド）金利先物から予測される利上げ回数  
（出所）Bloombergより野村アセットマネジメント作成

## EPS（1株当たり利益）成長率の事前予想と実績値との差



期間：2019年Q3（7-9月期）～2021年Q4（10-12月期）、四半期  
・事前予想は決算期終了直前週の数字を使用  
・2021年Q4は1月21日発表分まで  
（出所）Bloombergより野村アセットマネジメント作成

個別銘柄の記載は、特定銘柄の売買などの推奨、また価格の上昇や下落を示唆するものではありません。

\*当資料は、一部個人の見解を含み、会社としての統一の見解ではないものもあります。

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認ください。